MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．５．６　発行元
第 474 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から４冊を紹介する。いつも通りシリーズものがほとんど。文庫書下ろしの形である。レベル的にはそう高い内容を期待しないが、楽な気持ちで安心して読めるところが何より。

「花の季節」が進んで

今、この原稿を書いているのは４月１日。今年は「花の季節」がやってくるのが早い。梅の花はもう散り始め、桜の開花も今日、明日…。例年より二週間くらいは早まっている。３月のドカ雪は一度もなく、一気に春になってしまった。地球温暖化の影響もあるのだろうが。

学校で理科の授業をしていると、植物の単元の取り扱いには気を遣う。中学校一年生で「花と種子」を観察する時間があり、被子植物はもちろんのことだが、裸子植物のマツの雄花・雌花も観察時期を逃さずに見せる必要がある。毎日の植物状況調べは欠かすことが出来ない。

今回取り上げた作品は最近のニュースを題材に取り上げているものが多い。渡辺裕之作品のロシアの動向とウクライナ侵攻は世界の歴史に残る大きな出来事であり、安達瑶作品の政治と宗教の問題も放置しておくわけにはいかない問題である。自然を含めた世の中の動きを知ることは大切なこと。広い視野を持つことが求められる。

澤村御影『准教授・高槻彰良の推察9』

３月に角川文庫から出た本。シリーズ９冊目。副題は『境界に立つもの』。「境界」とは、この世とあの世の境界のことであり、本書の中では特定のトンネルだったり橋の上だったりする。別の見方で言えば霊的なものが出やすい場所ということだろう。

他人の嘘の言葉が歪んで聞こえる大学生の深町尚哉と民俗学准教授の高槻彰良のコンビが出会う不思議な出来事の物語。出だしは鎌倉の「お化けトンネル」の話から。新学期になり、大学のゼミで地域に広まる霊的な事象のテーマが話し合われ、実際に行ってみようという流れになる。尚哉の耳の秘密とか、高槻の家族の話も絡んでくるが、ゆっくり前進の印象。

鳴神響一『米沢ベニバナ殺人事件 警察庁ノマド調査官朝倉真冬』

３月に徳間文庫から出た本。『ノマド・シリーズ』の第三作。トラベルミステリで、警察庁の地方特別調査官をしている朝倉真冬が主人公。各地の警察の動きを見て、監察が必要と感じられた時に派遣され、身分を隠して隠密の捜査を進めるのが役目。結末で葵の御紋を取り出せる水戸黄門的な権限を示せるのが読みどころ。

今回は山形県の米沢。上杉氏の城跡の堀で撲殺された男性の事件を取り扱う。米沢は私にとっては馴染みの場所。最初に赴任した学校では吾妻山の天元台で夏合宿をしていた。本書でも温泉と地元の料理とベニバナ、織物が出てくる。ミステリとしての作りは非常にオーソドックス。アリバイトリックと言ったところか…。

安達瑶『“悪徳”弁護士・鵠沼千秋』

３月にハルキ文庫から出た本。安達瑶の作品も随分変化してきたなと感じる。『悪漢刑事シリーズ』などから見ると別世界。世間知らずの坊ちゃん弁護士・鵠沼千秋が主人公。大手弁護士事務所をクビになり、個人で開業してみたものの依頼なし。「悪徳弁護士」になると宣言して、誰もが眉をひそめるような悪人たちの弁護に向かってみるのだが…。女性への暴行、ひき逃げ、学校の中でのいじめ、選挙違反、経歴詐称…鵠沼は結局「悪徳」になりきれない中途半端な態度のまま振り回されることに。後半はある宗教団体と政界との結び付きに発展していく。

渡辺裕之『記憶の奴隷』

３月に角川文庫から出た本。『冷たい狂犬』シリーズの第五弾。影山夏樹の活躍を描く。昨年１２月に出た『凶撃の露軍・傭兵代理店・改』はロシアによるウクライナ侵攻をリベンジャーズの藤堂浩志側からキーウを中心に描いたものだが、本書はフランスのパリにいた夏樹側から見た流れとして書かれている。同時並行の物語。

ロシアのＫＧＢの後継組織ＦＳＢ（ロシア連邦保安庁）の庁舎から極秘のデータが盗み取られた。折しもロシアがベラルーシの軍事演習からウクライナ侵攻に打って出ようとしている時期。パリでＤＧＳＩ（フランス国内治安総局）の局長にスパイ容疑があって、監視の役目についていた夏樹の目の前でデータの入ったＵＳＢが受け渡される事態に…。巻き込まれてしまった夏樹はこの後、ベルリン、ワルシャワ、途中エジプトなどを経由してベラルーシ、モスクワへと移動していく。その間にウクライナ侵攻は進んでいるのだが…。最後は刑務所内での壮絶な戦いになる。夏樹は冷静、冷徹に敵を…。